八十日間世界一周

J. ヴェルヌ

江

定価二〇〇円第十回配本
昭和三二年一月十五日初版
世界大ロマン全集　十巻
八十日間世界一周　ジュール・ヴェルヌ
訳者　江口清（えぐちきよし）
モーリス・ルヴェル短編集
訳者　田中早苗（たなかさなえ）
発行者　小林茂
印刷者　中内佐光
発行所　東京都新宿区新小川町一ノ一六
電話（33）八五一一（代表）—五
振替東京　四一一一四七
創元社
印刷　暁・製本　鈴木
1957.1.
Printed in Japan

八十日間世界一周

ジュール・ヴェルヌ
江口　清　訳

世界大ロマン全集

10

東京創元社

LE TOUR DU MONDE EN QUATRE-VINGTS JOURS

Jules Verne

LES OISEAUX DE NUIT

Maurice Level

箱 絵

由 良 玲 吉

目次

八十日間世界一周……ジュール・ヴェルヌ作　江口清訳……九

一　フィリアス・フォッグとパスパルトゥーとは、主人となり下僕となることをたがいに同意すること……一一

二　パスパルトゥーは、ついにその理想とする人物をみいだし得たと認むるに至ったこと……一六

三　フィリアス・フォッグに高価についた会話が交されたこと……二二

四　フィリアス・フォッグが従僕パスパルトゥーをびっくり仰天させたこと……二九

五　ロンドン市場に新たに有価証券が出現したこと……三三

六　刑事フィックス君が、まことに無理ならぬ焦燥をみせること……三六

七　パスポートは取締り規約と関係なきことを一再ならず示すこと……四一

八　パスパルトゥーは、おそらく必要以上のことをいささかしゃべりすぎたこと……四四

九　紅海とインド洋とはフィリアス・フォッグのこころみに恵みを垂れたこと……四九

一〇　パスパルトゥーは幸運にも靴をなくしただけですんだこと……五五

一一　フィリアス・フォッグが法外な値段で乗り物を買うこと……六〇

一二　フィリアス・フォッグとその一行とはインドの森林中で事件に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

遭遇し、それにひきつづいて生じたこと……六九
一三　運命が大胆きわまる行為にほほえみかけたことを、一再ならずパスパルトゥーが立証したこと……七七
一四　フィリアス・フォッグはふたたび見ることのないすばらしいガンジス川の渓谷を下ったこと……八五
一五　札束のはいっている鞄は、さらに数千ポンド軽くなったこと……九二
一六　フィックスはパスパルトゥーの語ることを、まるで知らないふりをして聞いたこと……九九
一七　シンガポールからホンコンにいたる航海中に、いろいろなことが問題となること……一〇五
一八　フィリアス・フォッグ、パスパルトゥー、それぞれ思い思いに自分のしたいことを果たすこと……一一三
一九　パスパルトゥーはあまりに主人に関心をもちすぎ、それにひきつづいて生じたこと……一一七
二〇　フィックスが、フィリアス・フォッグと直接に関係を結ぶこと……一二六
二一　タンカデール号の船長は、あやうく賞金二百ポンドを失わんとすること……一三三
二二　パスパルトゥーは地球の相反地点にいて、慎重にも懐中には若干の金銭をもつべきだと考うるにいたったこと……一四二
二三　パスパルトゥーの鼻が、おそろしくのびること……一四九
二四　太平洋横断をぶじにはたすこと……一五五

二五　市民大会の日に、サンフランシスコの町を瞥見すること……一六三
二六　太平洋鉄道の急行列車に乗ること……一六九
二七　パスパルトゥーは一時間二十マイルの速力のもとにあって、モルモン教の講話を聞くこと……一七四
二八　パスパルトゥーの道理ある言葉は通らなかったこと……一八一
二九　合衆国の鉄道にしか起らないさまざまな出来事が語られるであろうこと……一八九
三〇　フィリアス・フォッグは、ただたんに自分の義務を果たすこと……一九七
三一　刑事フィックスが、フィリアス・フォッグの利害問題をほんとうに心から考えること……二〇五
三二　フィリアス・フォッグは悲運にたいし敢然とたたかいを挑むこと……二一三
三三　フィリアス・フォッグは、事にあたってすこしもさわがぬこと……二一七
三四　パスパストゥーをして怖しい、しかしおそらくは二度と言えない洒落を飛ばさせる機会を与えたこと……二二六
三五　パスパルトゥーは主人から命じられた言葉を、二度と主人に言わさせなかったこと……二三〇
三六　フィリアス・フォッグは、またしても市場価値をもちはじめたこと……二三六
三七　フィリアス・フォッグは世界一周をして、幸福以外には何ものもかも得なかったことが明らかになったこと……二四〇

モーリス・ルヴェル短編集……田中早苗訳…二四五
ある精神異常者……二四七
麻酔剤……二五三
犬舎……二五六
だれ？……二六六
生さぬ児……二七三
碧眼……二八一
乞食……二八九
青蠅……二九六
暗中の接吻……三〇〇
ペルゴレーズ街の殺人事件……三〇六
情状酌量……三一五
集金係……三二四

父と子……三三一
十時五十分の急行……三三八
あとがき……江口清・中島河太郎……三四五

八十日間世界一周

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

登場人物

フィリアス・フォッグ　主人公で、正義心に富む冷静寡黙なイギリス紳士。八十日間で世界一周ができると賭をして出発する。

ジャン・パスパルトゥー　フランス人で、フォッグ氏の忠実な下僕。正直者で愛すべき性格の持主。

フィックス　ロンドン警視庁の刑事。フォッグ氏を英蘭銀行の窃盗犯人だと信じ、そのあとをつける。自負心の強い男。

アウダ嬢　フォッグ氏主従に命を助けられたインド美人。

アンドリュー・ステュアート　技師。八十日間で世界一周は不可能だと、フォッグ氏の反対に賭けた革新クラブの会員の一人。

フランシス・クロマーティ閣下　インド駐在の陸軍少将で、フォッグ氏のカルタの相手。

スタンプ・プロクター　アメリカ陸軍大佐、つまらぬことでフォッグ氏と危うく決闘しようとする。

一　フィリアス・フォッグとパスパルトゥーとは、主人となり下僕となることをたがいに同意すること

一八七二年のこと、バーリングトン・ガーデンズの、サヴィール＝ロウ街七番地にある邸宅に、――その家でシェリダンが一八一六年に亡くなったのだが――革新クラブの会員で、自らは人目をひくことを極力避けていたものの、奇人として注目の的となっていたフィリアス・フォッグ氏が住まっていた。

イギリスの名誉とする大雄弁家の一人であるシェリダンのあとへ住まったこのフィリアス・フォッグという人物については、だれも何も知らず、謎の人物ではあるが、たいへんハイカラな、イギリス上流社会の花ともいうべき、りっぱな紳士であった。

かれはバイロンに似ていると、よく言われた。頭のてっぺんから足の先までそっくりであった。しかし口ひげと頬ひげのあるバイロンで、年老いることなく千年も生きながらえたであろうと思われる、ゆうゆう迫らざる感のあるバイロンであった。

たしかにイギリス人にはちがいないが、フィリアス・フォッグは、おそらくロンドン子ではなかった。取引所でも銀行でも、その他市内のどの店でも、かれの姿を見たものはなかった。ロンドンのどの碇泊区域にもドックにも、フィリアス・フォッグの荷を積んだ船を見たものはなかった。この紳士は、いかなる役所へも姿をみせたことはないし、その名前が弁護士の学校や、テンプルや、リンカーンズ＝インや、グレイズ＝イン（いずれも弁護士の資格を与える特権のあるロンドンの法学会――訳註）で鳴りひびいたことはなかった。かれは一度も法廷の裁判官席にも、高等裁判所にも、英国国庫にも、宗教裁判所にも、姿をみせたことがなかった。また工業家でも、商売人でも、農業家でもなかった。イギリス国立大学にも、ロンドン大学にも、技芸学校にも、ラッセル学院にも、西部

文芸学院にも、法律学校にも、また国王陛下がしたしく保護の手をさしのべていられる工芸学校にも、かれは関係していなかった。最後に、このイギリスの首都にたくさんある、アルモニカの団体から、主として害虫を駆逐する目的をもって設立された、昆虫研究所に至るまでたずねてみたが、かれはそのいずれにも属していなかった。

フィリアス・フォッグは革新クラブの会員であること、それだけだった。あるいはこのような不可解な紳士が由緒ある結社組織にはいっていることについて怪しむ人があるかもしれないが、そういう人はかれがペアリング兄弟銀行に当座預金があり、その紹介によって会員となっていることを知らないからだ。かれの振り出した小切手はかならず、きちんと遅滞なく、いつもかれの預金があるので当座預金でおとされるので、それで確固とした「信用」があったのだ。

では、このフィリアス・フォッグは金持なのか？もちろんそうである。しかし、どうしてそのような財を得たのであろうかといわれると、もっとも事情に通じている者でも、その返答に窮して、フォッグ氏の人となりを知ろうとしてもどうしてもわからないというのが常だった。というのは、貴重な、そして有益な、また慈悲ぶかいことのために助力を必要とするところにはどこでも、かれはひそかに、ときには名を秘して援助の手をさしのべていたからである。

かれほど話をしたがらない者は、まずあるまい。なるべく口をきかずにすませようとしているので、その寡黙が、いっそうかれを不可解な人物にさせているようだ。しかしかれの毎日の生活は、だれがみてもはっきりしていて、しかもそれは想像のおよびもつかぬほどキチンと、同じことを毎日くりかえしているのだ。

かれは旅行をしたことがあるだろうか？　おそらくそうなのだろう、なぜならかれほど世界の地図に通じている者はいなかったからだ。どんな辺ぴな場所でも、かれはよくその地の事情に通じていた。ときにはクラブで、消息を断って行方不明を伝えている旅行者について、いろいろと意見が出ることがあるが、そうしたとき、かれのことば少なに語る簡単明瞭なことば

は、予想たがわず、そのものズバリと、事件はきまってかれの言ったように終るのが常だった。たしかにかれは、足跡至るところなしと言ってさしつかえないだろう、――すくなくとも頭の中で、あちらこちらと旅行していたに違いない。

とはいえこの数年以来、フィリアス・フォッグがロンドンを離れなかったのも事実であった。他のひとびとよりいささかよくかれを知っていると称する人たちも、かれが毎日通る自宅からクラブへ至る路上以外のところでかれの姿を見たことはないと言った。かれはその一日の大部分を、新聞を読んだり、カルタをして暮らしていた。黙ってしてさえいればいいこの遊びは、よくかれの性質に適していたのであろうか、しばしばかれは勝ったが、けっしてそれによって獲得した金を自分のポケットへ入れるようなことはせずに、その相当な額にのぼる金を惜しげもなく、みんな慈善事業へ寄付してしまった。たしかにフォッグ氏が賭をするのは金が目的ではなくて、たんに賭そのものが楽しみなのだといえよう。氏にとっては賭ごとは一つのたたかいであり、困難に打ち勝たんがための、いわば一つの争闘であって、しかもこの争闘はからだを動かさずに、すこしの疲労も感ぜずに、その場でなし得るという点、かれの性質に適していたといえよう。

フィリアス・フォッグに妻子がないということ、これはしかしもっとも誠実だといわれる人にもあり得ることではあるが、しかし両親もなく友人もないということは実際稀にみるところであろう。かれはサヴィール＝ロウに独居し、だれもその内部にはいった者はいない。それゆえその内部については、だれ一人として知っている者はいなかった。下僕が一人いて、それが万事世話していた。きちんと定った時刻に、クラブの同じ部屋の同じテーブルで昼食も晩餐もとり、けっして同僚を招かず、また不意の客があるようなこともなかった。そして夜になると定刻にわが家へ帰ってくるのであって、革新クラブ内にある会員が自由勝手に使える、はなはだ気持のいい部屋を使うようなまねはけっしてしなかった。深更十二時に至ると必ず帰宅し、十時間をわが家ですごすのは、それは寝につくため、身

のまわりのことをととのえるためであった。氏が整然たる足どりで散歩をするのは、嵌木の床の玄関か、赤斑石のイオニアふうの数本の円柱がささえている青ガラスを嵌めた円屋根の下のまわり廊下であった。かれがとる昼食や晩餐は、クラブの料理場や、食膳支度所や、蠅帳や、魚市場や酪農場から持ち運ばれ、それらの美味珍肴はかれのテーブルの上に並べられて、黒い燕尾服姿の、やわらかなフランネル底の部屋靴をはいた容姿端然たる給仕人により、サクセン製のすばらしいテーブル掛の上に、特別の器に盛ってだされた。クラブのしるしを目立たぬほどに浮彫りした上等なカットグラスには、シェリー酒やポルト酒、もしくは肉桂樹皮、ほうらい羊歯、肉桂などを入れたぶどう酒が注がれ、それらの飲みものを冷しておくためには、多額の費用をかけて、アメリカの湖水からとり寄せたクラブの氷塊をあてた。

このような生活をしていてなお風変わりだといわれるなら、風変わりもまた良いかなである！

サヴィール＝ロウの住まいは華美な造りではないがたいへん便利につくられてあった。それに主人の毎日の生活に変化がないから、仕える者もはなはだ楽である。しかしフィリアス・フォッグは、たった一人の下僕に対してあくまでも厳格で、言われたとおりのことをしなければ承知しなかった。その日、十月二日、フィリアス・フォッグは下僕のジェームズ・フォースターを解雇した。ひげ剃りの湯はいつも華氏の八十六度と定っているのに、八十四度の湯を持ってきたからである。かれは代わりの男が十一時から十一時半のあいだにあらわれるというので、それを待っていた。

フィリアス・フォッグは両足をきちんとそろえ椅子に正座して、閲兵式にのぞむ兵隊のように膝に両手をおき、頭をあげ、からだをまっすぐにして、柱時計の針のすすむのをながめていた。この時計は非常に精巧にできていて、時分秒から月日、曜日までも示した。十一時半が鳴ったので、フォッグ氏はいつもの習慣どおり、家を出て革新クラブへ行かねばならなかった。

このとき、フィリアス・フォッグのいる小さい部屋のドアをノックする者があった。

ひまをだされたジェームズ・フォースターである。
「新しい下男です」と、かれは言った。
三十歳ほどの一人の若者があらわれて、おじぎをした。
「おまえはフランス人で、ジョンという名前だってね？」と、フィリアス・フォッグがたずねた。
「はばかりながら旦那さま、ジャンと申すのでございます」と、新参者は答えた。「あだ名をジャン・パスパルトゥーと申しまして、どんなことでもやってのけることから、そう申すのでございます。自分で申すのもなんですが、自分では正直者だと思っておりますが、ざっくばらんに申しますと、ずいぶんといろいろな職業をやってきました。艶歌師、サーカスの軽業師、レオタールのように飛び乗りもやったし、ブロンダン（いずれも当時の有名な軽業師―訳註）のように綱の上で踊りもしました。それから体操の教師になりました。最後に、自分の才能を最も有効に使うために、パリで消防の隊長になりました。わたしの考科表には、大火災に貢献したことが記載されてあります。そのうち家族生活をあじわいたくなったので、フランスを去って英国に渡り、下男として五年間暮らしました。ところがたまたま職のないところへ、フィリアス・フォッグ氏はイギリスじゅうで最も厳正な、引籠りがちの人であるときき、願わくばそのような方のそばで静かな生活を送り、パスパルトゥーというようなあだ名も忘れたいものだと思って、本日推参した次第でございます……」
「パスパルトゥーという名は気に入ったよ。雇うことにした。おまえについては、いい話を聞いてるんだ。雇傭条件は知ってるかな？」
「はい、ぞんじております」
「よろしい。では、いま何時かな？」
「十一時二十二分です」と、ポケットから大きな銀時計をとりだして、パスパルトゥーは答えた。
「おまえのは遅れている」と、フォッグ氏は言った。
「おことばにそむくようですが、そんなことはありません」
「おまえのは四分おくれている。まあ、どうでもいい。その差がわかっていればいいわけだ。ところでと、現

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong